大学入試センター試験における英語リスニングテスト導入の影響

須　田　孝　司

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第20巻第１号（2021年９月）抜刷

【論 文】

大学入試センター試験における英語リスニングテスト導入の影響[1]

須 田 孝 司

1 はじめに

日本の英語教育は大学入試と強い結びつきがあり，「大学入試を変えなければ日本の英語教育は変わらない」という意見を耳にすることがある。そのような意見と直接関係はないであろうが，日本の大学入試制度はこれまで大きな改革が3回行われてきた。1979年1月には，統一試験による大学共通一次学力試験（共通一次試験）が実施され，1990年度（1990年1月実施）にはセンター試験，2021年度（2021年1月実施）には共通テストへと移行した。2006年度のセンター試験から実施された英語のリスニングテストも，大学入試改革の一部と見なすことができるであろう。

本稿では，センター試験にリスニングテストが導入された経緯を概観した上で，リスニングテスト導入前後の高校生や大学生のリスニング力の変化を検証し，センター試験にリスニングテストが導入されたことにより，日本の高校生や大学生のリスニング力が向上したのかどうか議論する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第2節では，センター試験へのリスニングテスト導入の経緯を説明する。続く第3節では，センター試験と様々な英語検定試験のリスニングテストのスコアを比較し，高校生や大学生のリスニング力にどのような変化があったのか調査を行う。最後の第4節では，本稿のまとめを述べる。

2 リスニングテスト導入の経緯

1979年1月に実施された共通一次試験までは，各国公立大学が独自に入試問題を作成しており，難問・奇問が多いという批判があった（文部省，1992）。そこで，高校までの学習内容に沿った共通の試験問題を使い，受験生の基礎学力を測ることを目的

1 本稿の執筆に際し，静岡大学の白畑知彦先生に読んでいただき，有益かつ貴重なコメントを賜りました。この場を借りて感謝の意を表します。

として，1979年度の大学入試から共通一次試験が導入された。共通一次試験は，国公立大学と私立の産業医科大学（1982年度入試から参加）の入学志願者を対象とした試験であったが，1990年度のセンター試験からは，一部の私立大学も参加するようになった。また，センター試験は一般入試だけではなく，推薦入試や最近では総合型選抜入試といわれているアドミッションズ・オフィス（AO）入試にも活用されるようになり，多様な入試制度に対応しながら，大学入試における統一試験としての信頼を確立してきた。

共通一次試験が始まる前から，統一試験におけるリスニングテストの実施は検討されており，実際，1974年11月には，高校3年生を対象としたリスニング試行テストが行われた（内田・大津，2012）。しかし，最終的に共通一次試験にリスニングテストは導入されず，センター試験に移行してから16年経った2006年1月，初めて統一試験としての英語のリスニングテストが実施された[2]。ここでは，2006年度のセンター試験からリスニングテストが行われるようになった経緯を概観する。

リスニングテストの導入は，2003年3月に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」が策定され（文部科学省，2003），その5か年計画の中に，センター試験に英語のリスニングテストの実施が組み込まれたことがきっかけであると思われる。この行動計画では，大学入試において，英語でのコミュニケーション能力を適切に評価することが目標とされ，そのコミュニケーション能力を評価する1つの手段として，2006年度のセンター入試からリスニングテストを導入することが決まった。センター試験におけるリスニングテストの導入は，文科省の鶴の一声で決まったように感じられるかもしれないが，この大学入試改革は，以下に述べるように，様々な紆余曲折を経て成し遂げられた。

まず，1986年の臨時教育審議会において，中学・高校の英語教育では文法知識の習得と読解力の育成が中心となっていると批判され，授業の改善が要求された。1989年3月に告示された高校の学習指導要領「外国語」（文部科学省，1989）では，「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」というコミュニケーション能力の育成に大きく舵を切ることになった。そして，この学習指導要領のもと，1994年4月に入学した高校1年生から『オーラル・コミュニケーション』の授業が始まり，英語の授業内で「聞くこと」「話すこと」の活発な言語活動が展開されると期待された。しかし，多くの高校では，「聞くこと」「話すこと」といった活動は大学入試とは直接関係がないと判断し，『オーラル・コミュニケーション』の授業で実質的には文法の授業が行われていたり，読解を中心とした授業に取って代わられることがあった（杉野・徳田，2008）。このような状況に対し，当時の文部省は，学習指導要

2　センター試験にリスニングテストが導入される前は，40校近くの国公立大学の個別入試でリスニングテストを実施していた（内田・大津，2012）。また私立大学においても，英語学科や英文学科などで限定的にリスニングテストは行われていた（杉野・徳田，2008）。

領の重要項目の 1 つである英語でのコミュニケーション能力を育成するためには，センター試験で「聞くこと」を評価するリスニングテストを実施することが望ましいと報告している（橋本，1994）。

1999年 3 月に告示され，2003年度の高校 1 年生から学年進行で実施された学習指導要領では，コミュニケーション重視の傾向がさらに顕著になった。そして，「読むこと」「聞くこと」「書くこと」「話すこと」の 4 つの領域を関連させながら，「実践的なコミュニケーション能力」を育成することが英語の授業の目標となった。このころになると，文科省は，大学入試は中学・高校での指導内容に影響を与えるため，学習指導要領の目標を達成させるためには，大学入試において学習指導要領の目標を評価するようにすればよいと考えるようになっていた（高等教育局，2003）。さらに，リスニングテストの導入は，中学や高校における英語の指導方法の改善だけでなく，生徒のコミュニケーションに対するモチベーションや，英語の学習意欲に大きな影響を与えることができると期待され，リスニングテストのセンター試験への導入に大きく一歩踏み出すことになった。

しかし，全国規模の試験において共通のリスニングテストを実施するためには，検討しなければならない課題が残されていた。試験環境などの公平性と，機器や会場のトラブルが起きないという実施の際の安全・安定性である（石塚・小野・清水・諏訪部・白畑，1994; 橋本，1994）。センター試験が行われるようになってからも，公平性や安全・安定性の確保に懸念があるということで，リスニングテストの実施は長年見送られてきたが，大学や高校，センター試験を管理・運営する大学入試センターにおいても十分な議論や実施方法が検討されないまま，最終的には，2003年に2006年度センター試験にリスニングテストを導入することが決まった（内田・大津，2012）。

2003年以降，公平性や安全・安定性を確認すべく，教室のスピーカーから音を流すリスニング・プレ試行テストや IC プレーヤーの試作機を使ったリスニング試行テスト，障がい者を対象としたリスニング試行テストが実施され，機器の開発と実施方法の検討が同時並行的に行われた（内田・大津・石塚，2006）。そのような過程を経て，2006年 1 月21日，機器の不具合や対応の不手際なども散見されたが，全国の様々なセンター試験会場で統一の試験問題による英語のリスニングテストが実施された。

3　リスニングテスト導入前後におけるリスニング力の比較

センター試験に英語のリスニングテストが加わったことで，高校生や大学生のリスニング力にはどのような変化があったのだろうか。ここでは，まずセンター試験におけるリスニングテストの得点の経年変化を調査した上で，リスニングテスト導入前後の期間に，高校生や大学生を対象として継続的に集められた英語検定試験のリスニングテストの平均点を比較していく[3]。

3　各試験はその出題内容や受験生の質や人数も異なるため，得点の経年変化や試験の平均点を直接比較す

3.1　センター試験の得点の経年変化

センター試験の英語の筆記試験は，発音，アクセント，文法，語法を問う問題と読解問題から成り立っており，200点満点である。一方リスニングテストは，短文の会話文，少し長めの会話文，長めの解説文などから構成されており，50点満点の試験である。筆記試験は「読むこと」の面から受験生の英語力を評価し，リスニングテストはもちろん受験生の「聞くこと」の力を評価している[4]。

それでは，まずセンター試験の筆記試験（筆記）とリスニングテスト（L）の平均点の経年変化を見ていく。表1と図1は，リスニングテストが導入された2006年度から2020年度までの筆記試験とリスニングテストの平均点を100点満点で示している。

表1　センター試験の筆記試験とリスニングテストの平均点の経年変化

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
筆記	63.76	65.54	62.63	57.51	59.07	61.39	62.07	59.57
L	72.50	64.94	58.90	48.06	58.78	50.34	49.10	62.90

年度	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
筆記	59.43	58.08	56.21	61.86	61.87	61.65	58.15
L	66.32	70.78	61.62	56.22	45.34	62.84	57.56

（注）平均点は比較しやすいように100点満点に換算している。

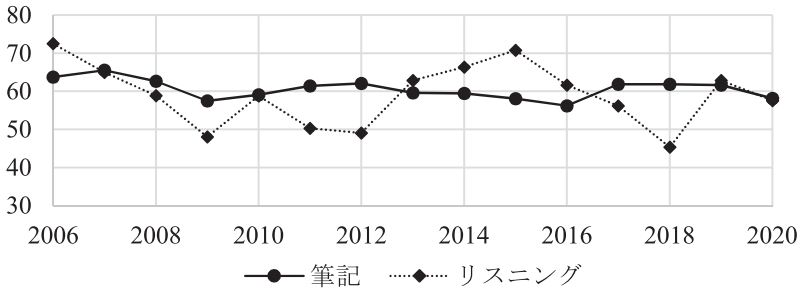

図1　センター試験の筆記試験とリスニングテストの平均点の経年変化

図1の実線で示された筆記試験の平均点は56点台（2016年度）から65点台（2007年度）で推移しており，それほど極端な変化はない。一方，リスニングテストでは，導入された2006年度は70点を上回っていたが，その後は2009年度まで下降傾向が続き，

ることに対して批判があることは重々承知しているが，ここでは，これまでの試験の成果（得点）を活用し，リスニングテストの導入がどのような影響を与えたのか検証を行う。

4　筆記試験に含まれる単語の強勢問題は，受験生の単語の発音の能力についてもある程度判断することができると提案されている（白畑，1991）。

2010年度以降は45点台（2018年度）から70点台（2015年度）の幅で変動している。

リスニングテストが導入されれば，英語の授業で「聞くこと」の言語活動が活発になり，受験生の「聞くこと」の能力の向上が期待されていた。しかし，センター試験のリスニングテストの平均点は毎年上昇しているわけではなく，平均点の経年変化を比較しただけでは，リスニングテストの導入が「聞くこと」の能力の向上に効果があったかどうか，はっきりしたことは言えない[5]。

3.2　センター試験と様々な検定試験の比較

ここでは，センター試験と様々な英語検定試験のリスニングテストの得点を比較し，センター試験にリスニングテストが導入されたことにより，高校生や大学生のリスニング力にどのような変化があったのか検証する。

3.2.1 センター試験と TOEIC

Test of English for International Communication（TOEIC）は，TIME Inc.アジア総支配人であった北岡靖男氏が日本人の英語コミュニケーション能力を高めるため，1977年にアメリカの Educational Testing Service（ETS）に働きかけ，開発された（McCrosite, 2010）。現在では，一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会がその運営を行い，多くの日本人が TOEIC Listening & Reading（TOEIC LR）を受検している。TOEIC には他に，TOEIC Speaking & Writing（SW）と TOEIC Bridge の 2 種類あるが，TOEIC SW は現状では受検者数が少なく，TOEIC Bridge は主に高校生が対象の試験となっている。最も受検者の多い TOEIC LR は，リスニングとリーディングの 2 つのセクションからなり，各セクションの出題数は100問（計200問）である。それぞれのセクションの最低点は 5 点，最高点は495点となり，TOEIC LR のスコアは10点から990点まで，5 点刻みで受検者に示される。

建内・小塚（2010）では，2005年度から2008年度までの 4 年間の間に，愛知教育大学の 3 つのコースに入学してきた 1 年生の TOEIC LR の平均点がどのように変化したのか調査している。3 つのコースとは，「英語専攻・英語選修」（英語），「国際文化コース」（文化），「幼児教育コース」（幼児）である。それぞれの TOEIC の受検者数を表 2 に示す。

表 2 各コースの TOEIC の受検者数

年/月	2005/4	2006/4	2007/7	2008/7
英語	17	24	26	24
文化	122	102	75	71
幼児	16	20	20	20

5　受験生の英語のリスニング力が高くなったとしても，センター試験のリスニングテストの平均点がそれほど高くなることはないかもしれない。ここでは，センター試験の筆記試験やリスニングテストの難易度は毎年ほぼ同じであると仮定する（脚注 3 を参照のこと）。

英語専攻・英語選修には，二次試験においてリスニングテストを含む英語の試験があり，最も学生数の多い国際文化コースでは，二次試験に英語の試験はあるが，リスニングテストは実施していない。幼児教育コースは，二次試験に英語の試験がない。建内・小塚（2010）は，大学入試に際し，その3つのコースの1年生は英語学習への取り組み方に違いがあると考えており，その取り組み方の違いがTOEIC LRのスコアに影響を与えるかどうか検証を行っている。

表3はリスニングとリーディングの年度ごとの平均点であり，図2と図3は技能ごとの平均点をグラフにしたものである。

表3　TOEIC LRの平均点の推移

	リスニング				リーディング			
年/月	**2005/4**	**2006/4**	**2007/7**	**2008/7**	**2005/4**	**2006/4**	**2007/7**	**2008/7**
英語	266.8	286.4	281.9	298.1	229.4	231.8	252.5	272.0
文化	240.4	273.5	241.1	246.7	185.2	205.8	204.1	218.8
幼児	249.7	230.0	208.0	227.0	181.6	165.0	178.3	184.2

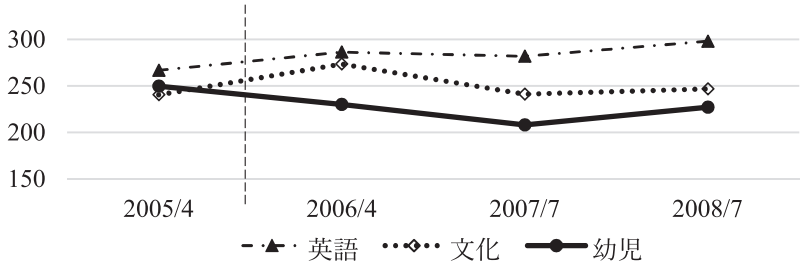

図2　リスニングの平均点の推移

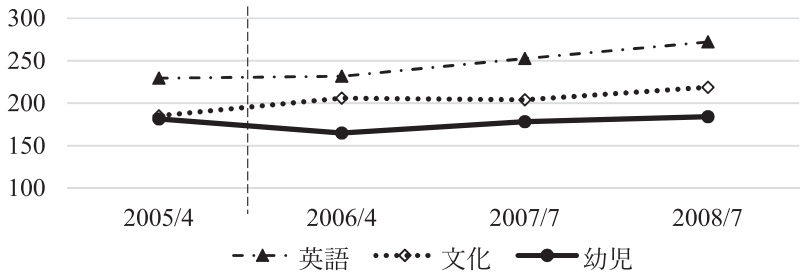

図3　リーディングの平均点の推移

建内・石塚（2010）では，センター試験にリスニングテストが導入される前年の2005年4月と，導入後の2006年4月の平均点を比較している。統計分析の結果，点線で示されている国際文化コースだけが，2006年度のリスニングとリーディングの平均

点が2005年度より高くなっていることが明らかになった。

この結果について建内・石塚（2010）は，入学後も英語力の強化が求められる英語専攻・英語選修では，センター試験にリスニングテストが導入される前から二次試験でリスニングテストが行われていたため，2005年度と2006年度のリスニングテストの平均点に差がなかったのではないかと推察している。また2007年度以降の結果を見ると，2006年度にはリスニングテストの平均点が上昇した国際文化コースでさえ平均点の低下が見られ，センター試験へのリスニングテストの導入が入学生のリスニング力の向上に一時的な効果はあったかもしれないが，その効果は長続きしなかったと考えられる。

3.2.3　センター試験と TOEFL-ITP

Test of English as a Foreign Language（TOEFL）は，主にアメリカの大学などに留学する際に要求される英語資格試験であり，Institutional Test Program（ITP）はその団体向けテストである。TOEIC と同じ ETS により作成され，日本では国際教育交換協議会が試験の運営・実施を行っている。この試験は ITP であるため，TOEFL の過去問が使用されており，留学の際に正式な語学力の証明書として使うことはできない。しかし，大学などの登録団体が試験日時や場所を自由に設定することができるため，アカデミックな英語力を測る手段として現在でもよく利用されている。TOEFL-ITP は，3 つの部門で構成されており，リスニング（L）50問，構造・ライティング（SW）40問，リーディング（R）50問が出題される。

ここでは，林・徳見・志水（2012）をもとに，2005年度から2011年度までの7年間に九州大学で集められた TOEFL-ITP の平均点を見ていく。九州大学では，センター試験にリスニングテストが導入される前年の2005年度から，全ての入学生が TOEFL-ITP を受検している。

部門ごとの平均点を表 4 と図 4 に示す。

表4　部門ごとの TOEFL-ITP の平均点

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
受検者数	1488	2380	2443	2480	2499	2450	2503
L	44.8	44.5	44.9	45.0	42.8	43.9	46.2
SW	45.9	45.9	45.3	46.4	48.0	47.4	46.9
R	46.8	46.3	46.6	46.8	47.3	46.5	47.2

図4　部門ごとの TOEFL-ITP の平均点

図4より，リスニングの平均点は2009年度が最も低くなっていることがわかる。センター試験にリスニングテストが導入された2006年度前後は，これといって目立った変化はない。

次に，学部ごとのリスニングテストの平均点を比較する。九州大学には11の学部があるが，林・徳見・志水（2012）では，学生の均質性と人数を考慮し，文系学部の文学部と法学部，理系学部の理学部と農学部のデータを検証している。表5と図5に4学部のリスニングテストの平均点を示す。

表 5　4 学部のリスニングテストの平均点

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
文学部(160 人前後)	45.8	45.9	46.0	46.3	44.3	45.0	47.2
法学部(190 人前後)	45.2	45.6	46.1	46.0	44.1	44.9	47.1
理学部(260 人前後)	44.1	43.6	44.4	44.4	42.5	42.9	45.7
農学部(230 人前後)	44.1	44.5	45.1	44.8	42.6	44.5	46.3

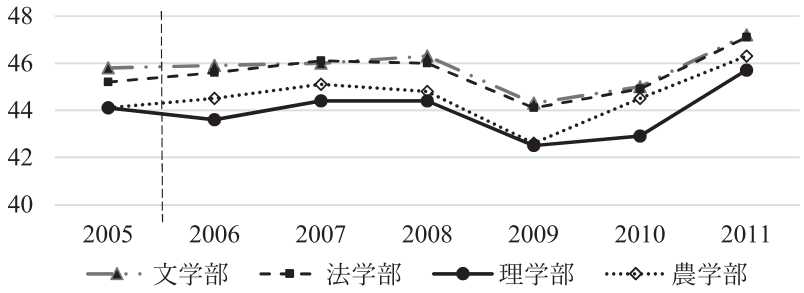

図 5　4 学部のリスニングテストの平均点

図 5 より，文系学部である文学部（▲）と法学部（■）の平均点が理系学部より高く，2009年度のリスニングの平均点は，すべての学部において他の年度より低くなっていることがわかる。また，2011年度はどの学部も平均点が上昇している。

この結果は，センター試験にリスニングテストが導入された後も，入学生のリスニング力が向上しているわけではないことを示している。また，2009年度の平均点は全体的に低く，2011年度は高くなっているという傾向が見られるが，林らは，その傾向は誤差の範囲内であるのか，学生の能力を反映したものかよくわからないと述べている。

図 1 のセンター試験のリスニングテストの平均点を見ても，2009年度の受験生の平均点は他の年度より低くなっており，九州大学の TOEFL-ITP の結果も，その年度の日本全国の受験生の英語力を反映しているのかもしれない。しかし，2011年度の結果を見ると，九州大学の TOEFL-ITP の平均点は上昇しているにも関わらず，センター試験の平均点が高いわけではない。TOEFL-ITP などの民間の英語検定試験は，異なる時期に異なる内容の試験を受検したとしても，同じ検定試験であれば平均点を比較することができると言われているが，受験生や九州大学の学生の英語力の差が，本研究で観察されたセンター試験や TOEFL-ITP のリスニングテストの得点に反映されていると言い切ることはできない。

3.2.4　センター試験と英語プレイスメントテスト

Hirai，Fujita，Ito ＆ O'ki（2013b）は，TOEFL-ITP と類似した英語プレイスメント

テストを使い，2002年度から2011年度に筑波大学に入学した1年生の11年間の英語力の変化を比較している[6]。このプレイスメントテストは3つの部門で構成されており，リスニング（L）23問，リーディング（R）23問（単語に関する10問と読解に関する13問），文法（G）20問から成り立っている。

Hirai らの研究では，人文系（H1と H2）と理系（S1と S2）の4学部の学生の平均点を分析している。人文系の H1は言語や文化を専攻する学部であり，理系の S1は，S2と比べ，入試において高い英語力が求められる学部である。分析対象となった4つのグループは，文系・理系の区別だけではなく，英語に対する要求の高さも考慮されている。

表6と図6に，全体の部門別の平均点を示す。

表6　部門別の平均点

年度	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
人数	1408	1631	1655	1642	1638	1553	1557	1616	1567	1537
L	512	510	496	501	509	509	515	514	512	513
R	516	507	507	519	502	509	512	511	513	516
G	515	517	509	522	516	503	511	521	510	511

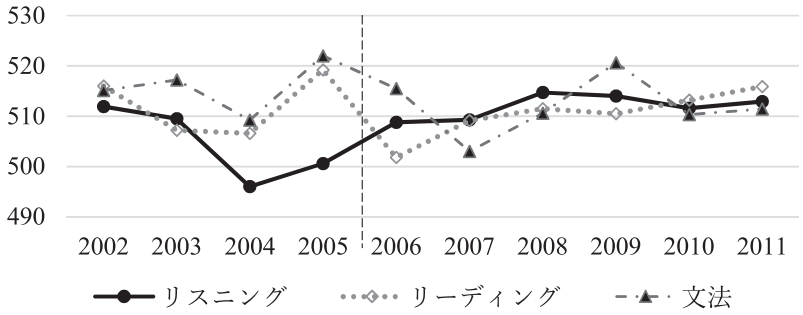

図6　部門別の平均点

図6の実線で示されたリスニングテストの平均点は，2004年度と2005年度には下がっているが，2006年度には上昇している。しかし，その後はそれほど大きな変化はなく，5点程度の幅で推移している。

表7と図7に学部別のリスニングテストの平均点を示す。

6　2005年度のこのプレイスメントテストと TOEFL-ITP にはかなり高い相関が認められており（r=0.79），Hirai らは，プレイスメントテストは TOEIC-ITP と同等であると主張している。

表 7　リスニングテストの平均点（学部別）

年度	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
人数	399	392	400	393	455	451	463	481	473	399
H1	511	512	502	507	515	512	521	522	517	517
H2	517	510	494	495	504	507	504	507	500	504
S1	555	536	515	521	537	531	542	546	531	553
S2	506	504	498	502	506	501	504	503	504	510

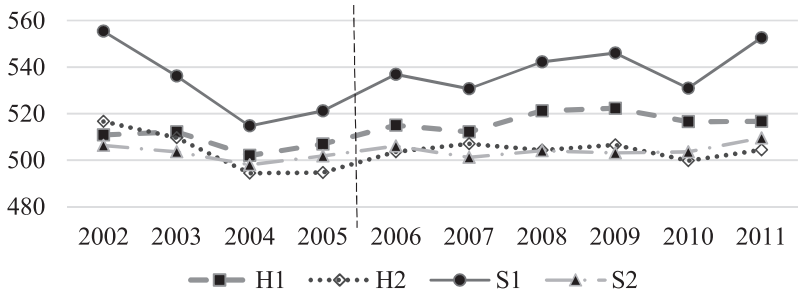

図 7　リスニングテストの平均点（学部別）

毎年のようにリスニングテストの平均点が高い学部は理系の S1であり，言語・文化を専攻している H1は，H2や S2とほとんど差はない。統計分析を行うと，2005年度までは H1と H2，S2の平均点に差はなかったが，2006年度には H1の平均点は H2より高くなり，2007年度以降では H1は，H2と S2の 2 つの学部の平均点より高くなっていることがわかった。

Hirai らは，2007年度以降の H1と H2，S2の平均点に差が見られたことから，英語などの言語に興味のある学生には，センター試験のリスニングテストの導入がリスニング力の向上にプラスに働いたと解釈している。しかし，図 7 を見ると，2007年度から2010年度にかけて H2と S2の平均点が510点辺りから徐々に下降している一方で，H1の平均点が520点前後であまり変化していないため，2007年度以降のリスニングテストの平均点に差が見られたと考えることもできる。この結果からも，リスニングテスト導入が，受験生のリスニング力の向上に効果があったと結論づけることはできない。

3.2.5　センター試験と GTEC

Global Test of English Communication（GTEC）は，ベネッセコーポレーション（ベネッセ）が実施・運営している英語検定試験であり，1999年度から始まった比較的新しい試験である。ベネッセは，通信教育の進研ゼミや高校生にとっては馴染みのある進研模試（ベネッセ総合学力テスト）を展開しており，日本の英語教育を熟知し

ている企業の1つである。したがって，GTECは日本の受験生にとっては取り組みやすい検定試験であると思われる。

GTECは，小学生から社会人までが受検できるよう3種類のテストがあり，さらに各テストは，表8のようにそれぞれ3つから4つの異なるレベルに分かれている。

表8　GTECの種類とレベル

種類	レベル	対象	スコア上限
GTEC Junior	Junior 1	小学5年生	400
	Junior 2	小学6年生	480
	Junior Plus	中学1年生～	560
GTEC	Core	中学2年生～3年生	840
	Basic	中学3年生～高校2年生	1080
	Advanced	高校1年生～高校3年生	1280
	CBT	高校2年生後半～高校3年生	1400
大学生・社会人向けGTEC	Academic	大学生	1000
	Business	大学4年～社会人	1000
	Business（公開）[7]		1000

例えば，中高生を対象としたGTECには，Core，Basic，Advanced，CBTの4つのテストがあり，その違いは，語彙のレベルが対象の学年に沿っているだけではなく，テストによって受検方法が異なる。CBTはパソコン上で解答する方式を採用しており，それ以外は，リスニングとリーディングはマーク式，ライティングは記述式，スピーキングはタブレット端末を使った録音式というように領域によって異なる解答方法を採用している。さらに，各タイプの上限スコアにも違いがあり，Coreが840点，Basicが1080点，Advancedが1280点，CBTが1400点となっている。

ここでは，ベネッセが2003年度から2006年度まで行った「東アジア高校英語教育GTEC調査（東アジア調査）」の結果をもとに，高校生のリスニング力の推移について検証する。東アジア調査では，GTEC for STUDENTSを日本・中国・韓国の高校生に受検してもらい，その三ヵ国の高校生の英語力を比較している。GTEC for STUDENTSは表8にはないが，上限スコアが1280点であることから判断すると，そのテストは高校生の実力を測るために使われるAdvancedと同等のテストであると思われる。参考までにAdvancedの出題内容を表9に示す。

7　GTEC AcademicやBusinessはパソコンを使って行うテストのため，登録された人であれば好きな場所で受検できる。Business（公開）は，指定された試験会場で行う公開会場版のテストである。

表 9　Advanced の問題数・試験時間・スコアの上限

	問題数	試験時間	上限スコア
リスニング	40 問	25 分	320 点
リーディング	43 問	45 分	320 点
ライティング	2 問	25 分	320 点
スピーキング	8 問	25 分	320 点

以下では，日本の高校生のリスニングテストの結果のみ紹介する。

東アジア調査に協力した日本の高校は，ほとんどの生徒が 4 年制大学へ進学する進学校であり，2003年度の調査には15校から4,300人の生徒が参加し，2004年度は 4 校から2,052人が参加した。長沼・吉田（2010）では，2003年度と2004年度の 2 年間継続して調査に参加した 4 校のデータを扱っている。その 4 校のリスニングの平均点を表10に示す。

表 10　2003 年度と 2004 年度のリスニングの平均点

	参加人数	平均点
2003 年度（1 年生）	1,114 人	155.0
2004 年度（2 年生）	1,046 人	166.5

2003年度の平均点は高校 1 年生の得点であり，2004年度の平均点は，その2003年度に受検した 1 年生が 2 年生になった時の得点である。表10を見ると，2 年生の方が11.5点高くなっていることがわかる。

センター試験にリスニングテストが導入された2006年 1 月以降のリスニングテストの得点はどのように変化したのだろうか。東アジア調査では，リスニングテスト導入後の2006年度に追跡調査を行っている。

2006年度の調査（長沼，2007）では，2003年度と2006年度の調査に協力した 5 校2,497人の 1，2 年生のデータを検証している。2006年度の調査結果は，表10に示した長沼・吉田（2010）の 4 校とは別の高校である。長沼（2007）の2003年度と2006年度の 1，2 年生のリスニングテストの平均点と，表10に示す長沼・吉田（2010）の 1，2 年生のリスニングテストの平均点を，表11と図 8 のようにまとめる。

表 11　2003 年度と 2006 年度の平均点（長沼, 2007）と長沼・吉田（2010）の平均点の比較

	1 年生（1241 人）	**2 年生（1256 人）**
2003 年度	139.3	153.2
2006 年度	154.4	176.0
長沼・吉田	155.0	166.5

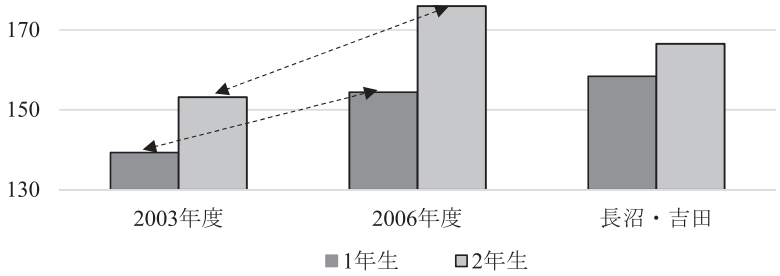

図 8　2003 年度と 2006 年度の平均点（長沼, 2007）と長沼・吉田（2010）の平均点の比較

長沼（2007）の2003年度と2006年度の平均点は，矢印で示すように2006年度の方が 1 年生は15.1点，2 年生は22.8点高くなっている。この結果だけを見ると，長沼（2007）が主張しているように，2006年度の 1，2 年生には，1998年に告示され2002年度から実施された中学校の学習指導要領のもと，中学時代からリスニングに取り組んだことや，センター試験にリスニングテストが導入されたことの影響があったと考えることができる。しかし，長沼・吉田（2010）の結果と比較すると，長沼（2007）の主張には疑問が生じる。

長沼・吉田（2010）の2003年度の 1 年生の平均点（155.0点）は，長沼（2007）の2006年度の 1 年生の平均点（154.4点）とほぼ同じであり，2006年度の 1 年生のリスニングテストの得点が高いわけではない。さらに，長沼（2007）の2003年度の 1 年生の平均点（139.3点）は，長沼・吉田（2010）の2003年度の 1 年生の平均点（155.0点）より15.7点も低くなっている。つまり，同じ年度に入学した 1 年生の間にも学校によって生徒の質に差があり，一概に中学時代からの英語の指導や，大学入試を意識したリスニングテストへの対応が，高校生のリスニング力に影響を与えていると判断することは難しい。

さらにこの東アジア調査の結果は，近年の高校生のリスニング力とも比較することができる。文科省では，2014年度より2017年度までの 4 年間，中学 3 年生と高校 3 年生を対象とした大規模な「英語教育改善のための英語力調査事業」[8] を実施しており，その調査では，全国の 7〜9 万人の公立高校の 3 年生からデータを集めている[9]。

8　英語教育改善のための英語力調査事業報告(https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/index.htm）
9　2017年度の参加人数も 6 万人程度ということだったが，その概要には約67万と書かれており，人数が増

この英語力調査で利用されたテストはGTECとは銘打ってはいないが，リスニングの試験時間（23分），上限スコア（320点），出題数（36問）から判断すると，GTEC for STUDENTSをベースとした問題が利用されていると考えられる。ここでは，表12のように2014年度，2015年度，2017年度の3年間の英語力調査の結果について検証する[10]。

表12　英語力調査の参加人数とリスニングテストの平均点

	人数	平均点
2014年度	65,711	117.1
2015年度	78,569	120.7
2017年度	669,737	127.3

長沼（2007）の東アジア調査の分析では，2003年度の1年生の平均点が最も低く139点台であったが，この英語力調査の高校3年生のリスニングテストの平均点は最高でも127.3点（2017年度）となっており，10年以上前の高校1年生の平均点より10点以上低い。この結果は，2003年度の日本全国の高校1年生のリスニング力が高かったということを示しているわけではない。東アジア調査には，ごく限られた進学校の1，2年生が参加していたが，2014年度から実施された英語力調査は，様々な高校に在籍している高校3年生を対象とした調査である。つまり，英語をしっかり勉強している生徒もしていない生徒も含まれている。東アジア調査と英語力調査では，母集団の質が大きく異なっているのである。

長沼（2007）では，2003年度と2006年度の東アジア調査の結果をもとに，センター試験にリスニングテストが導入されたことにより高校生のリスニング力が向上したという主張をしているが，上述したように調査に協力した高校生の質によりリスニングテストの得点に差が生じるため，リスニングテストの導入が高校生のリスニング力の向上に効果があったという明確な根拠はないと考えられる。

4　おわりに

文部科学省（2003）は，大学入試にリスニングテストが導入されれば，中学・高校の授業内容が変化し，リスニングなどのコミュニケーション活動が活発になり，日本人の英語でのコミュニケーション能力が向上すると目論んでいた。確かに，リスニン

えたのは，母集団に対する標本の抽出率に応じて抽出ウエイトをかけて集計を行っているためと説明されている（平成29年度　英語力調査結果（高校3年生）の概要：https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile /2018/04/06/1403470_03_1.pdf）。

10 2016年度は高校3年生を対象とした英語力調査は実施していない。

グテスト導入後，リスニング活動に対して肯定的に取り組むようになったという調査結果（山村・大津・宮埜，2012）や，授業中のリスニング活動が増えただけでなく，生徒自ら進んで英語を聞くようになったという報告もある（Hirai, Fujita & O'ki, 2013a; 小栗，2009; 杉野・徳田，2008; 松沢，2009）。しかし，授業時間内にリスニングの時間を大幅に増やすことは難しく，さらには受験予定の高校3年生の約8割が，学校以外でリスニングをほとんど行っていないという調査結果もあり（柳川，2012），学校により，また個人によりその取り組み方に差がある。

センター試験にリスニングテストが導入された2006年度前後の様々な検定試験のリスニングテストの平均点を比較すると，2006年度には平均点の上昇が見られたが，その後はそれほど目立った変化はなかった。英語学習に対する動機づけにより，英語を使ってコミュニケーションを図りたいと思っている学習者の平均点は，2006年度以降も向上した可能性があるかもしれないが（Hirai 他，2013b），そのように思っていない大多数の学習者のリスニング力には，センター試験にリスニングテストが導入されたとしてもあまり大きな影響はなく，一概に高校生や大学生のリスニング力が向上したと考えることは難しい。

リスニングテストは，コミュニケーション能力を評価する1つの手段ではあるが，コミュニケーションには，ことばを聞いて理解する以外に，読んで理解することも，話して伝えることや書いて伝えることも含まれる。また，そもそも英語のコミュニケーション能力の育成を叫ぶより前に，日本語でのコミュニケーション能力を育て，自分の意思を論理的に伝えることや，他人の意見を尊重しながら議論を行うことができるようになる必要があるのではないだろうか。今後，大学入試などにスピーキングテストを導入する動きが活発になるかもしれないが，スピーキングテストの開発や評価方法の確立に時間と費用が掛かるだけで，リスニングテストと同様，それほど大きな効果は得られないであろう。

参考文献

橋本克久.（1994）「『平成9年度からの大学入試センター試験の出題教科・科目等について―中間まとめ―』についての解説」『大学入試フォーラム』17, pp.118-124.

林篤裕・徳見道夫・志水俊広.（2012）「九州大学入学者に対する英語標準化テストのリスニング調査について」『平成23年度 大学入試センターリスニングテスト検証研究会報告書』pp.39-48.

Hirai, A., Fujita, R. & O'ki, T.（2013a）「センターリスニングがもたらすリスニング学習意欲への影響: 大学種別・入試形態・専攻ごとの分析に基づく考察」『JACET Journal』57, pp.59-81.

Hirai, A., Fujita, R., Ito, M. & O'ki, T.（2013b）"Washback of the center listening test on learners' listening skills and attitudes". *ARELE (Annual Review of English*

Language Education in Japan), 24, pp.31-45.

石塚智一・小野博・清水留三郎・諏訪部真・白畑知彦.（1994）「大学リスニングテストに関する実験的研究」『大学入試センター研究紀要』23, pp.1-36.

高等教育局.（2003）「『英語』のリスニングテストの導入について」『大学入試フォーラム』26, pp.24-29.

松沢伸二.（2009）「グローバル化時代における大学教育と入試制度」『大学入試研究の動向』26, p.31.

McCrostie, J.（2010）"The TOEIC in Japan: A scandal made in heaven". *JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter*, 14(1), pp.2-10.

文部科学省.（1989）『高等学校学習指導要領』東京: 開隆堂.

文部科学省.（1999）『高等学校学習指導要領』東京: 開隆堂.

文部科学省.（2003）「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(https://e-jes.org/03033102.pdf)　(2020年 9 月 4 日閲覧)

文部省.（1992）『学制百二十年史 上巻』東京: ぎょうせい.

長沼君主.（2007）「日本の高校生の新旧課程における能力変化と教員の意識変化」『東アジア高校英語教育 GTEC 調査2006』pp.36-45.

長沼君主・吉田研作.（2010）「東アジア高校英語教育調査から見た日韓中高校生における英語 Can-Do 自己評価スコア比較」『Arcle Review』4, pp.6-24.

小栗裕子.（2009）「センター試験リスニングテストの波及効果－高校における指導法への提言－」『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』14, pp.35-44.

臨時教育審議会.（1986）『教育改革に関する第二次答申』東京: 文部科学省.

白畑知彦.（1991）「筆記試験による発音問題の妥当性―大学入試センター試験を例にとって―」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇 教科教育学篇』23, pp.161-172.

杉野健太郎・徳田稔.（2008）「センター試験のリスニング導入と高校英語教育―長野県野沢北高等学校の例を中心として―」『信州大学人文学部人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』42, pp.95-111.

建内高昭・小塚良孝.（2010）「センター試験英語リスニング導入前後における TOEIC 得点に関する調査研究―国際文化コース，中等英語，幼児教育を対象として―」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要 1 』13, pp.127-131.

内田照久・大津起夫.（2012）「大学入試センター試験への英語リスニングテストの導入に至る歴史的経緯とその評価」『日本テスト学会誌』9(1), pp.77-84.

内田照久・大津起夫・石塚智一.（2006）「英語リスニング・試行テストの実施経過と受聴機器選定のためのアンケート調査結果」『大学入試センター研究紀要』35, pp.1-18.

柳川浩三.（2012）「教師はリスニングを教え，生徒は英語を聞いているか―大学入試

センターリスニング試験の波及効果―」『Dialogue』11, pp.1-14.